〈教育講演〉

門　眞一郎*

自閉スペクトラム障害の問題提起行動とコミュニケーション支援**

児童青年精神医学とその近接領域　**65**（２）；247―253（2024）

Ⅰ．はじめに

まず用語について。自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder: ASD）という名称が普及しているが，私は自閉スペクトラム（Autism Spectrum: AS）と自閉スペクトラム障害（ASD）を用いる。AS は，独特の発達特性（発達のメリハリ）を持っている状態である。そのメリハリと環境（社会的障壁）との相互作用の中で障害という状態になれば，ASD と言う。その場合の「障害」とは，障害者基本法の表現を借りると，「継続的に日常生活または社会生活に相当な制限を受ける状態」ということである。そして「社会的障壁」とは，発達のメリハリがある者にとって，「日常生活または社会生活を営む上で障壁となるような，社会における事物，制度，慣行，観念その他一切のもの」を言う。

自閉スペクトラム障害や知的能力障害（Intellectual Disability: ID）の人に見られる所謂「問題行動」の多くは，社会の主導権を掌握している多数派が築く社会的障壁への，ASD の人からの「問題提起（チャレンジ）」に他ならない。ASD の人は，周囲の出来事や他者からの働きかけを理解することが難しく，また自分の要望・感情・体調を適切に表出することも難しいために，適切なコミュニケーション行動が取れないことが少なくない。他方，不適切な行動の方が，その効果は大きく，しかも即効性があり，必要な努力は少なくてすむために，その不適切な行動（問題行動）が学習されることになる。学習された「問題行動」が，その後維持され，頻度も程度も著しく増大して常態化すると，強度行動障害と呼ばれるようになる。

「問題行動」を繰り返させ，すなわち強化し，維持させているのは，実は周囲の人たちの対応であることが少なくない。「問題行動」をやめさせようとする周囲の人たちの対応が，実はその「問題行動」を強化していることが少なくない。したがって，「問題行動」とは，「社会的障壁が立ちはだかっている！」という問題提起であり，「その社会的障壁を取り除いてほしい」という合理的配慮の暗黙の要請に他ならない。そこで，問題行動を「問題提起行動」と呼びたい。

ASD や ID の人にとって，社会的障壁の最たるものの１つが，コミュニケーションの障壁である。これが多くの問題提起行動の根本的な原因であることが少なくない。言葉を話すだけではコミュニケーションとは言えないし，コミュニケーション手段は言葉以外にもたくさんある。そしてコミュニケーションは双方向性の行為である。他者からのコミュニケーションの「理解」と，他者に欲求・要望・感情・体調などを伝えるコミュニケーションの「表出」があり，ASD の人たちは，いずれにも独特の特性（メリハリ）を抱えている。

要するに，行動障害とは，「コミュニケーションについての，周囲（社会）の理解と支援が

*フリーランス児童精神科医
e-mail: kado1219@gmail.com

**2023年11月15日，弘前市民文化交流館，アートホテル弘前シティおよびオンライン開催でオンデマンド配信（2023年12月１日～１月10日）された第64回日本児童青年精神医学会総会「教育講演」である。

悪いことが問題だ！　それを改善してほしい」という問題提起であり，強度行動障害とは，強力かつ頻繁な問題提起行動とみることができる。

Ⅱ．問題提起行動への対処

問題提起行動，ひいては強度行動障害への対処は，問題提起行動が出ていないうちに，先行支援をすることである。まず，「この状況で問題提起行動と機能的に等価な代替行動を取れば強化されるよ」ということを暗示する合図や手がかり（弁別刺激）を理解しやすくするためには，ハリを活かした視覚的構造化が欠かせない。しかし，これはあくまで理解コミュニケーションの支援である。

当然ながら，表出コミュニケーションの支援も欠かせない。先行支援としては，機能的コミュニケーション・トレーニング（Functional Communication Training: FCT）である。特に，発語がない，あるいは乏しい人には，拡大代替コミュニケーション（Augmentative & Alternative Communication: AAC）手段を使えるようにすることが極めて重要である。とりわけ，絵カード交換式コミュニケーション・システムTM（Picture Exchange Communication System: PECS®）は，他に類を見ない独特の利点を備えている。

Carr and Durand（1985）は，問題提起行動と言語的コミュニケーション行為は，形式は異なるが，機能としては等価であり，後者を強化すれば，前者は弱まることを約40年前に実証し，従って問題提起行動に取り組むためには，まず機能的行動アセスメントが重要であると述べている。この論文以降，FCT に関しては，現在までに200本以上の論文が書かれている（主に英米）。奇しくも同じ1985年に，絵カード交換式コミュニケーション・システム™（PECS®）が開発された。

機能的行動アセスメントの方法としては，1）インタビュー：例えば機能的行動アセスメント・インタビュー用紙（Glasberg, 2006）を用いる。2）直接観察：散布図（スキャッタープロット），ABC データ，記述分析（Glasberg, 2006）などを用いる。3）チェックリストや質問紙を用いる。例えば，動機アセスメント尺度（Motivation Assessment Scale: MAS）（Durand and Crimmins, 1988）や機能分析スクリーニング・ツール（Functional Analysis Screening Tool: FAST）（Iwata et al., 2013）。4）機能分析（FA）：これは実験的に問題提起行動を誘発することになるので，行動分析の資格を持つ人が関わるべきであるが，簡易版とも言える代替アセスメント・モデルもある（Glasberg, 2006）

1．PECS® と問題提起行動

PECS® により問題提起行動が軽減あるいは解消されることについては多くの報告がある（Frea et al., 2001；Charop-Christy et al., 2002；Ganz et al., 2009；Danov et al., 2010）。しかし，いずれも PECS® のトレーニング 6 段階（フェイズ）の途中までしか行なっておらず，さらに PECS® とともに教えるべき 9 つの重要なコミュニケーション・スキルについて取り上げた研究は見当たらない。ただし絵カードで拒否することを教えて，問題提起行動を解消させた研究がある（Rispoli et al., 2014）。しかし，PECS と 9 つの重要なコミュニケーション・スキルをすべて教えれば，問題提起行動の終息ばかりか，予防にも大きな効果を発揮するはずである。

2．PECS とともに教える 9 つの重要なコミュニケーション・スキル

これらのコミュニケーション・スキルがなぜ重要かというと，欲しいモノや必要なモノを手に入れたいということを，穏やかにかつ効果的に表出できないと，同じ結果を手に入れるために，別の手段を試す可能性がとても高くなるからである。そしてその別の手段とは，例えば攻撃・破壊・自傷などの問題提起行動なのである。また，他者からのメッセージが理解できないと，危険なことになったり，苦痛を覚えることになる可能性がある（Bondy, 2011）。

表1　PECSとともに教える9つの重要なコミュニケーション・スキル（Bondy, 2011）

表出スキル	理解スキル
①欲しいモノやしたいこと（強化子）の要求	⑥要求実現まで「待つ」こと，「ない」ことの理解
②手助けの要求	⑦絵カード指示の理解
③休憩の要求	⑧活動間の移行の理解
④拒否（いいえ）	⑨スケジュールの理解
⑤肯定（はい）	

3．問題提起行動の機能

問題提起行動に対処するには，まず機能的行動アセスメントにより，その機能を確定するべきであることは先に述べた。その上で，機能が等しくて社会的に適切な代替行動（機能的に等価な代替行動）を教え，強化することになる。

行動の機能の分類としてよく用いられるのは，①注目要求の機能，②物や活動の要求機能，③回避や逃避の機能，④自動強化の機能の4分類であるが（井上，2015），ここでは，Bondy（2011）による分類を取り上げる。

i）強化子の要求機能

前述の分類では，注目①，具体物・活動②，感覚的（刺激）④に相当する。

ii）嫌悪事象からの逃避／回避機能

前述の③に相当する。

機能i），ii）の行動は何らかの結果を求めるコミュニケーション行動であるが，さらにiii）先行事象に誘発された行動がある（この場合結果は変わらない）

強化子が入手できない，あるいはなかなか入手できず待たされることに誘発されて，あるいは痛みや不安，不快感に誘発されての行動である。

Ⅲ．問題提起行動に対する支援の3本柱

機能を明らかにしたうえで，支援策を考えるが，以下，支援の3本柱とでもいうべき方法が考えられる。

1．先行事象（A:antecedent）に対して

望ましい行動や代替行動のきっかけや手がかり（弁別刺激）を提供する。つまり視覚的構造化によって，構造すなわち状況の意味と見通しを伝える。さらに機能的コミュニケーション・トレーニング（FCT）により，機能的に等価な代替行動を教える。FCTとしては，PECS®及びそれと連動させて9つの重要なコミュニケーション・スキル（表1）を教えることが勧められる。先行事象に対しては，⑦絵カード指示の理解，⑧活動切り替えの理解，⑨スケジュールの理解を教えることになる。いずれも視覚的構造化をする上では欠かせない理解コミュニケーション・スキルである。

2．行動（B：behavior）に対して

機能的に等価な代替行動を教えることになる。Bondyの機能分類に従うと，

機能1：欲しいモノやコトの獲得

通常のコミュニケーション手段ではうまくコミュニケーションが取れない人には，絵カード交換式コミュニケーション・システム（PECS®）が最良の手段である。

PECSのトレーニングは6つのフェイズを順に進んで行く。各フェイズは，

1：絵カードで自発的に要求する
2：離れた位置から絵カードを自発的に交換しにきて要求する（自発的な対人接近）
3：要求に使う絵カードを弁別し自発的に選択する
4：文を構成して自発的に要求する
5：「何がほしい？」と聞かれて応答的に要求する
6：応答的なコメントから自発的なコメントへ

このうちのフェイズ1から5で，欲しいモノ

やコトを自発的に要求することを教える。

機能２：嫌なことからの逃避／回避

表出スキル②：手助け要求を教える

強化子を楽しむためには手助けが必要となる場面を設定する。本人が困ったと思ったとき（癇癪を起す前）に，「手伝って」カードを使うことを，プロンプターが身体プロンプトで教える（２人制プロンプト法）。そして身体プロンプトをフェイディングしていく。

表出スキル③：休憩要求を教える

ここで言う休憩は，活動からの一時的な回避や逃避であり，何かを楽しむ余暇時間ではない。休憩エリア（ソファやマットなどとタイマー）を用意し，一時逃避したくなる状況を設定し，癇癪が本格化する前に，休憩カードを渡すことを，プロンプターが身体プロンプトで教える（２人制プロンプト法）。休憩カードを受け取った相手は，本人を休憩エリアに誘導し，タイマーを設定することを身体プロンプトする。タイマーが鳴ったら，止めることを身体プロンプトし，次に得られる強化子を示し，元の活動にもどす。そして身体プロンプトをフェイディングしていく。

機能３：直前の状況による誘発

理解スキル⑥：「まって」の理解を教える。

欲しいモノを要求してきたら，「待ってね」と言い，視覚的手がかりとなる「待って」カードを渡す。最初は，１秒以内に回収し，要求物を渡す。様々な状況で１日に何度もトレーニングし，一度に１，２秒ずつ待ち時間を延ばしていく。

理解スキル⑥：ない（NO）の理解を教える。

ないものは見せられないが，カラの袋や容器，皿は見せられるし，両手を開いて見せることもできる。そして同時にユニバーサルNOシンボルを絵カードに貼る。

さらに，９つのスキルに加えて，感情や体調などをコメントする表出スキルも必要だろう。

３．結果事象（C）に対して

機能的に等価な代替行動や望ましい行動を取れたら分化強化する。また，問題提起行動が出ていないことを強化する他行動分化強化（DRO）も使える。

それでも出てくる問題提起行動は強化しない。すなわち消去する。しかしその場合，一時的に問題提起行動が激しくなる消去バーストという現象に備えておかねばならない。

Ⅳ．ABCDEF ダイナミック氷山モデルとABCDEF 分析

ASD の人への支援を考えるときに，よく氷山モデルが使われる。その先駆けは米国の TEACCH プログラムであるが，それは医学モデルで考えられている。その後，井上（2015）が社会モデルの観点から氷山モデルを考え，ワークシートも提案している。

私は，社会モデルでの考えをさらに進めて，社会的障壁のために氷山は海上に大きく浮き上がり，社会的障壁が除去されると，すなわち合理的配慮がなされると，氷山は海面からほとんど姿を現さなくなる。したがって，自閉スペクトラム「障害」は固定したものではなく，環境（社会）次第では，自閉スペクトラムの状態にとどまり得る。氷山は，ダイナミックに浮いたり沈んだりするのである（図１，２）。

ASD の人の問題提起行動の機能を理解するためには，AS のメリの特性を理解する必要があるが，支援を考える際には，ハリに注目することが重要である。ワークシートなどに，発達特性を書く欄を設けても，メリにばかり注目しがちである。ハリにも注目することを忘れないために，私のワークシート（ABCDEF 分析シート）には，メリとハリとを分けて記入できるようにした。ABCDEF は，それぞれ A：先行条件（Antecedent），B：行動（Behavior），C：結果事象（Consequence），D：発達特性／メリ（Deficit），E：発達特性／ハリ（Extra），F：機能（Function）である（図 3）。記入例として，相手を殴って，欲しいタブレットを手に

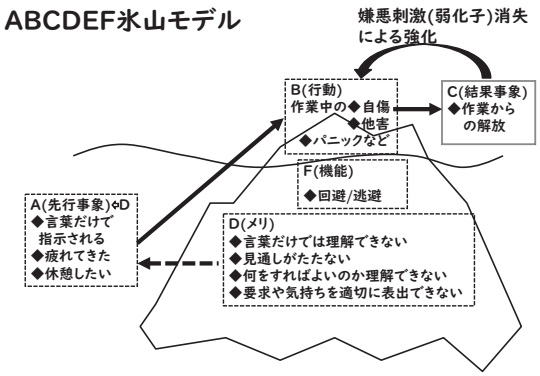

図 1　問題提起行動の ABCDF

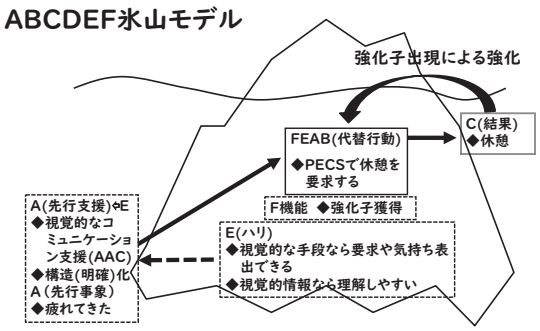

図 2　機能的に等価な代替行動の ABCEF

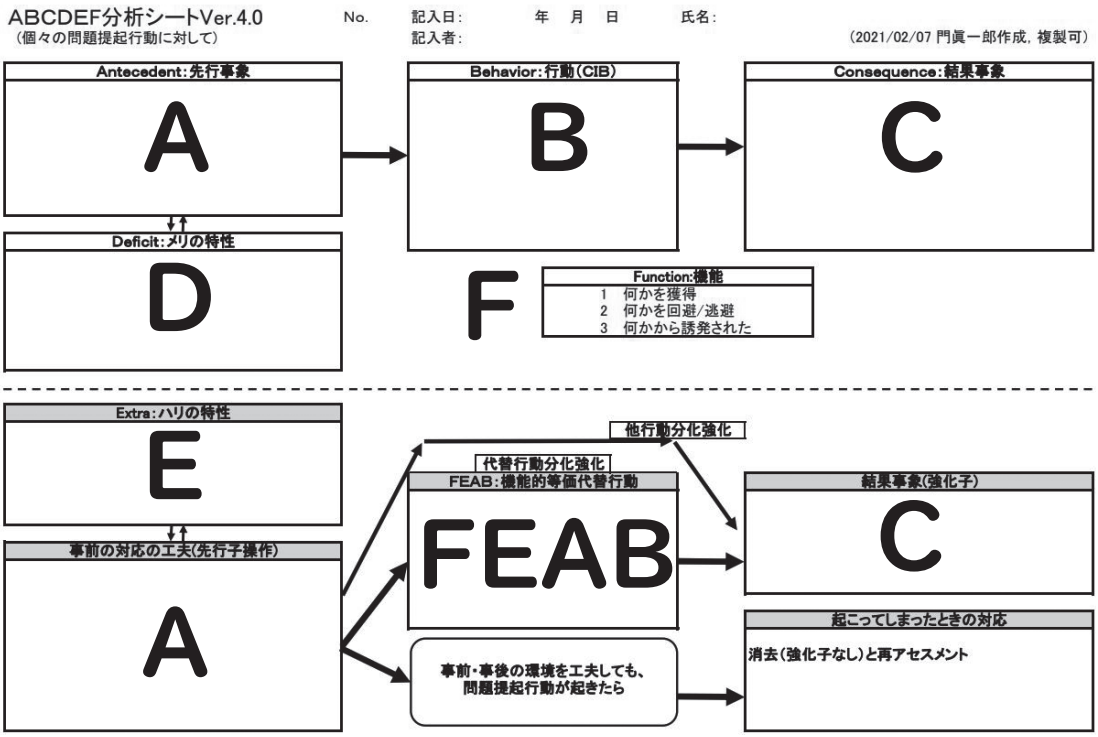

図 3　ABCDEF 分析シート

入れるという，獲得機能の問題提起行動についての分析シートを図 4 に掲げた。

この ABCDEF 分析に基づく問題提起行動への支援の要点は以下のようになる。

A：先行事象（弁別刺激の明確化 e.g. 視覚的構造化）

B：機能的に等価な代替行動（Functionally Equivalent Alternative Behavior: FEAB）を教える

C：結果事象（強化子出現による正の強化，弱化子消失による負の強化）

D：問題提起行動の理由をメリから考える

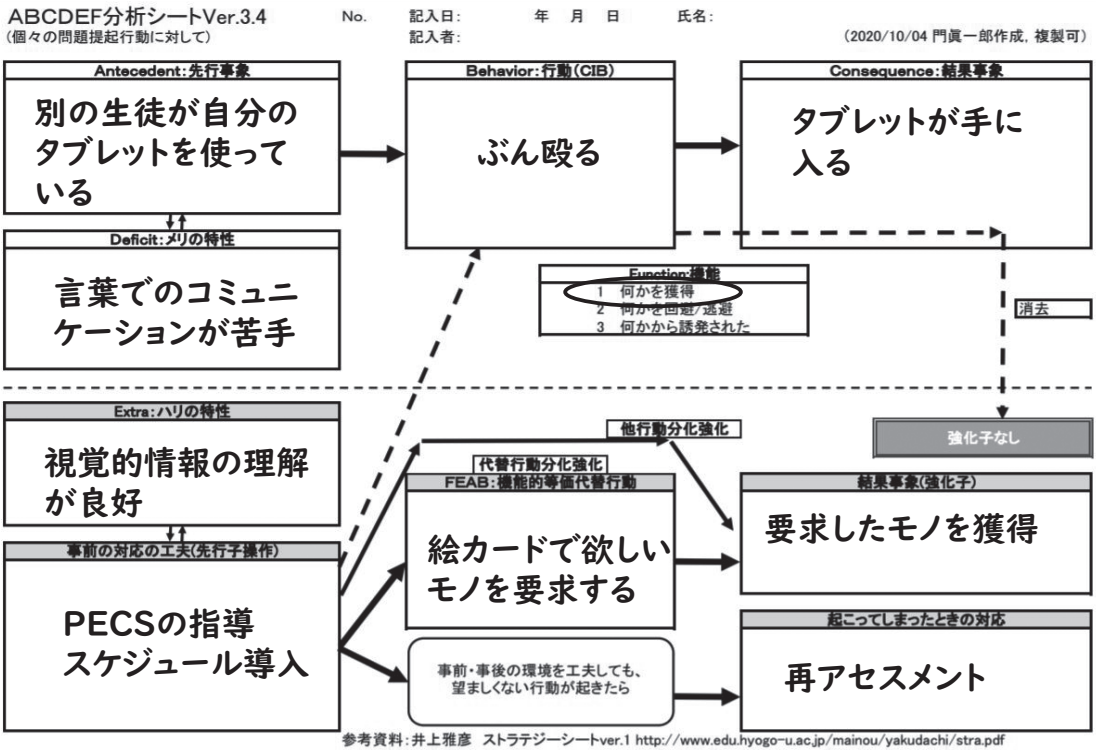

図 4　獲得機能の問題提起行動の例

E：Ａと Ｂに活かすハリを考える
F：Ｂの機能から FEAB（機能的に等価な代替行動）を考える

V．おわりに

問題提起行動の場合も，「何事も百の治療より一の予防」である。それには，何をおいても強力なコミュニケーション・スキルを構築する必要がある。ほとんどの問題提起行動は，自分の欲求やニーズをコミュニケートする効果的な方法が他にない場合に生起する。強力なコミュニケーション・スキルがあれば，要求するために不適切な行動をとる必要はなくなる。

かつて本学会改革委員会委員長であった小澤（1972）は，50年前に次のように書いている。「もし新しく到達し得た私なりの視点に立った《治療》というものがあるとすれば，自己表現の道を確保し，自己の感受性を研ぎ澄ましながら，現実と闘い，症児と我々とが共に現実を切り拓く武器を，いかに闘い取って行くのかというところにしかあり得ません。」この言葉に，私はずっと励まされてきた。「自己表現の手段を与えよ，社会的障壁を除去せよ」と，当事者からの問題提起に真摯に応えなければならない。すなわち，まずは機能的コミュニケーション支援を！

COI 開示

本稿に関して，開示すべき利益相反（COI）はありません。

注

ABCDEF 分析による支援シートは，私のホームページ（児童精神科医門眞一郎の落書帳，https://

kado2006.sakura.ne.jp/book1/book1.htm）からダウンロードできますので，ご自由にお使いください。

文　献

Bondy（2011）: *Pyramid Approach to Education.*（教育へのピラミッド・アプローチ．ピラミッド教育コンサルタントオブジャパン）

Carr & Durand（1985）: Reducing behavior problems through functional communication training. *Journal of Applied Behavior Analysis,* **18,** 111–126.

Charlop-Christy MH, Carpenter M, Le L et al.（2002）: Using the Picture Exchange Communication System（PECS）with Children with autism: Assessment of PECS acquisition, speech, social-communicative behavior, and problem behavior. *Journal of Applied Behavior Analysis,* **35,** 213–231.

Danov, Hartman, McComas et al.（2010）: Evaluation of two communicative response modalities for a child with autism and self-injury. *Journal of Speech and Language Pathology-Applied Behavior Analysis,* **5,** 70–79.

Durand & Crimmins（1988）: Identifying the variables maintaining self-injurious behavior. *Journal of Autism and Developmental Disorders,* **18,** 99–117.

Frea, Arnold & Vittimberga（2001）: A Demonstration of the effects of augmentative communication on the extreme aggressive behavior of a child with autism within an integrated preschool setting. *Journal of Positive Behavior Interventions,* **3,** 194–198.

Ganz, Parker & Benson（2009）: Impact of the Picture Exchange Communication System: Effects on communication and collateral effects on maladaptive behaviors. *Augmentative and Alternative Communication,* **25,** 250–261.

Glasberg & LaRue（2006）: *Functional Behavior Assessment for People with Autism.*（自閉症の人の機能的行動アセスメント（FBA）．明石書店）

井上雅彦（2015）：私たちの行動のわけ．（牛谷正人他（編）行動障害のある人の「暮らし」を支える．中央法規）

Iwata, Deleon & Roscoe（2013）: Reliability and validity of the functional analysis screening tool. *Journal of Applied Behavior Analysis,* **46,** 271–284.

小澤勲（1972）：《幼児自閉症論の再検討》の自己批判的再検討．児童青年精神医学とその近接領域，**13,** 54–63.

Rispoli, Camargo, Machalicek, et al.（2014）: Functional communication training in the treatment of problem behavior maintained by access to rituals. *Journal of Applied Behavior Analysis,* **47,** 580–593.